

## 神宮の式年遷宮に込められた叡智と技



浅野忠利

今回は神宮の式年遷宮の総体について触れたが、今回はそこで発揮される知と技の実態について述べたい。

## ●宇治橋

戦前までは、宇治橋は老朽の度合いに応じて、随時架け替えられていた。第59回式年遷宮は敗戦後の昭和24年に行われることになっていたが、4年間延期され、この年には宇治橋の架け替えだけが行われた。これ以来、式年遷宮の4年前に架け替えられることとなり、近年式年遷宮の一齣に加えられ、中心的行事の一つとなっている。第61回遷宮では、延べ約9千人の宮大工と船大工によって新しい橋が誕生した。昔から伊勢では、木造船の建造が盛んで、朝鮮出兵の日本丸を建造した。この船大工は橋板に擦り合わせという技術を入れ込むことによって、橋の水処理を確かなものとし、耐久性を高める。こして1億人近い人々の行き帰を支えるのである。

## ●建築

20年毎の式年遷宮で、古代の建物に関わる技術と共に用材調達や生産のシステムが護られ引き継がれてゆく。遷宮に要する大工や職人は延べ25万人になんなんとする。遷宮の主演は山田工作所の大工である。山田工作所では、常時30人にもならない大工が、遷宮のピークには170人に膨れ上がり、また30人に戻る。多い人で3回の遷宮にかかわり、知と技を蓄え、次世代に引き継いでゆく。檜は1400年ごろまでは神宮の領内5,500haで調達されていた。その後不足気味になり、幾多の変遷を経て木曾に頼ることとなっているが、やがて自給自足が実現する。今回の遷宮では全体の木材使用量の25%が領内の間伐材でまかなわれる。一回の遷宮に必要な檜は10,000 m<sup>3</sup>。主要な用材は樹齢300年、棟持ち柱は500年の樹齢を要する。

伊勢の宮川の上流に八ヶ所の萱山がある。約235haの萱山から、年間5千束刈り集める。約5年分23,000束が、一回の遷宮に必要な。山田製作所で精選し、乾燥保管する。遷宮には葺き職人が20人必要だが、前回の遷宮で育った職人が、後継者養成に当たっている。

## ●装束神宝

装束は衣服とその装飾品を含む神座と殿舎の鋪設品、服飾品、遷御の儀に用いられる品々をさす。神宝は神々の用に供する調度品の総称で、紡績具、武具、武器、馬具、楽器、文具、日用品などである。

式年遷宮では神座、殿内を飾り、遷御の儀式に用いる

装束神宝もまたすべて新しく整えられる。その数850種、2,500点と言われる。これらを20年に一度新たにすることによって、我が国の工芸を高いレベルに保つのに多に貢献してきた。技の担い手の中心は、職人から名工・工芸家・人間国宝といわれる人々に移行しつつある。こうした人々が、厚い信仰の裏付のもと、知と技を尽くして、日本の工芸の基盤を支えてきた。だが、神宝装束の殆どは、江戸時代までは上流階級での日常性の延長線上の超高級品という位置づけであったが、現在では実用性が失われたものも多い。それだけに技の継承には多大のエネルギーを要する。材料の調達難や技術伝承の困難さが多くの装束・神宝を厳しい局面にたたせている。

- ・ 太刀の鍛造用の玉鋼の原料不足と日本独自の和鉄精錬技法の後継者減少

- ・ 蓑や傘のうち和傘は材質の低下と削り手の激減による高級品の入手難

- ・ 襪足袋の調達は、足袋づくりの店が全国で4件という現状の中、福助足袋のみに頼る現状への将来不安

このような伝承の危機に直面している例は枚挙にいとまが無いが、20年毎の遷宮ゆえの朗報も多い。

- ・ 正倉院の優れた染織品で、平安時代に失われた技法が、先回の遷宮で蘇生

- ・ 葛編製品は昭和に入って途絶えていた技術が戦後復活

- ・ 団扇に張る紋羅の織は昭和になって復元

- ・ 櫛に用いられる黄楊は鹿児島県指宿産を20年間乾燥。10.6cmの間に83本の歯、歯間0.35mm。これを手鋸で引く技術は健在。

等々尊い技の蘇りや継承が、広く工芸の分野を中心に前例踏襲という没個性的な厳しい定めの中で、磨かれる。

## ●色

清浄を尊ぶ伊勢神宮では純白を第一とし、ほかの色を排除してきたが、中世になると職制が複雑になり服装の統一が崩れてきた。衣冠束帯といわれる装束の色は職階によって黒、赤、青など異なる色の袍を身につけ、そのうえに、どれにも純白の袍を纏うことになっている。古来は全員が純白の装束をつけたという精神と伝統が、今も残されている。白は光の色、神の色である。

次回からは欧米文化の原点と言われる「ベネディクト戒律」を紹介し、欧米のもの創りの流れに入りたい。以上